

読書・テレビ・卓越化： ウェブ調査データの多重対応分析

磯 直樹* **

序論

読み書き能力ないしはリテラシーの問題は、文化と階級の関係(Hoggart 1957)や大衆教育の問題(Vincent 2000)として、多くの国においてあらゆる人に関わる問題として捉えられてきた。この問題は、社会生活を営む上で最低限の読み書き能力があるか否か、エリートと大衆を隔てるリテラシーの水準はどこにあるのか、といった形で分節化することが可能である。さらに、就学年齢にある子どものリテラシーの問題と成人のそれは分けて考えるべきであろうし、読む能力と書く能力は一応分けて考えられる。リテラシーは概ね、文化の不平等を教育との関係で捉えるための概念であろう。

ここで問題を限定して、成人の読書に焦点を当てよう。読書というのは、ある程度のリテラシーがないとできない。しかし、読書の量でリテラシーの程度を測れるわけではなく、読書の質をリテラシー概念で表せるかは明らかではない。むしろ、読書は、リテラシーとは別の形で社会的不平等を表すと考えられる。

このような観点から読書を捉えた論者の一人として、P.ブルデューがいる(Bourdieu 1979:

Bourdieu & Chartier 2010)。ただし、ブルデューの読書に関する言及は非常に少なく、断片的である。ブルデュー社会学を「読むこと」の領域に応用したのは、彼自身よりも他の論者である(Bennett et al. 2009=2017: 181-183)。ブルデューの議論は、日本の社会学にも一定の影響を与えてきた。読書という観点に限定するならば、まずは「教養主義」の研究をいくつか挙げることができよう。筒井(2009)は『日本型「教養」の運命』において、「文化の享受を通しての人格の完成という意味での「教養」の観念が近代日本においてどのように成立したのかを問うている。彼は、このような意味での教養の観念を「教養主義」と定義し、「エリート文化の対極にあると考えられる大衆文化の中核」にあるものとして「修養主義」を挙げている(筒井 2009: 3)。日本の教養主義と修養主義は、明治期に同一物として成立した。筒井はこれをもって、ブルデューが挙げたフランスの事例とは異なるとしている(筒井 2009: 37-38)。この論点は別として、筒井が教養主義の現象として主に想定しているのは読書による卓越化である。

筒井が明治期から戦前までの教養主義を扱ったのに対し、竹内は『教養主義の没落』において戦後から1980年代までの教養主義を扱っている。竹内によれば、「教養主義といわれた学生文化は文学・哲学・歴史関係の古典の読書だけでなく、総合雑誌の購読をつうじて存立していた面が大きい」(竹内 2003: 13)。竹内が挙げている文部省教

2022年11月30日受付

* 江戸川大学 基礎・教養教育センター 非常勤講師

** 東京藝術大学 社会連携センター 特任講師

社会学史, 社会調査

字局の1938年の統計によれば、総合雑誌読書率は帝国大学の学生で44.7%にも上っていた（竹内2003: 15）。このように、戦前から1960年代にかけて興隆したエリート学生文化としての教養主義が1970年前後から衰退していくというのが、竹内の議論の骨子である。

福間（2017）は『「働く青年」と教養の戦後史』において、戦後の高度成長期のエリート学生文化ではなく「集団就職をしたような勤労青年」に人生雑誌の主要な読者層として焦点を当て、そうした雑誌に「大衆教養主義」を読み取っている。竹内（2003）と福間（2017）の議論は教養主義を支えた社会階層という観点からは補完関係にあると考えられる。両者において共通しているのは、雑誌や本の読者であることを教養主義の担い手と捉えていることである。両者の観点を総合すれば、読むことと社会分化の関係を問題にできる。

筒井、竹内、福間は、読書という行為に着目して卓越化としての「教養主義」を論じた。彼らの議論に対し、佐藤卓己は『テレビ的教養：一億総博知化への系譜』において戦後日本の民主化と教養の関係をテレビに着目して論じた（佐藤2008）。教養主義と結びつくことの多かった読書に対し、大宅壮一が「一億総白痴化」と形容したように、テレビはしばしばとして教養主義とは相容れないものと考えられてきた（佐藤2008: 103）。他方で、教育放送・教育番組を通じた「一億総博知化」は、そのように人口に膾炙したテレビのイメージがあってこそ可能になった。こうして1957年以降、テレビ番組の種類に応じて「白痴化」と「博知化」という差異化＝分化が意識されるようになった（佐藤2008: 117-123）。活字とは差別化されてきたテレビというメディアに着目することで、教養主義の問題を活字というメディアの性質に還元せず、文化的卓越化の問題として扱うことが可能になる。

戦後の日本において、日本の教育テレビ体制が確立されてから「一億総中流意識」を支える装置としてのテレビが普及し、テレビは他のメディアと競合しながら現在もマスメディアとしての確固たる地位を保持している。これまでの日本では、

特に地上波のテレビは、卓越化や不平等の問題と関連付けて論じられることはほぼなかった。他方でイギリスなどでは、そのような観点からもテレビが論じられてきた。

そのような研究の古典の一つは、初版が1973年に刊行されたレイモンド・ウィリアムズの『テレビジョン』（Williams 2002）である。ウィリアムズはところどころで階級や不平等の問題に関連づけてテレビ放送の分析をしているが、イギリスとアメリカのテレビ番組の傾向を2種類にわけて考察している（Williams 2002=2020: 109-121）。この2種類を区別する特徴の一つとして、「教養」番組か「商業ベース」の番組かという点を彼は挙げてはいるが、番組編成については他の様々な要素も考慮に入れる必要があるとしている。

ベネットらの『文化・階級・卓越化』においては、ウィリアムズの議論も踏まえつつ、ブルデュー社会学を展開する形でテレビと卓越化の問題が社会調査にもとづいて論じられている（Bennett et al. 2009=2017: 252-187）。ベネットらは、「読むこと」についても卓越化の問題として分析している（Bennett et al. 2009=2017: 181-183）。テレビに関しては、同書では映画と対照させることで映像メディアと卓越化の関係が議論されている（Bennett et al. 2009=2017: 252-287）。このように、読書もテレビもイギリスにおいては卓越化の問題として経験的研究で扱われてきた。他方、日本においては卓越化としての「教養主義」が読書とテレビの双方に関して論じられてきたものの、時代は1970年代までに留まっている。

21世紀の日本において、読書とテレビを通じて卓越化を論じることが可能であろうか。日本社会一般の傾向として一般化するには、無作為標本抽出で回答者の選ばれた全国調査で回収率が十分に高い⁽¹⁾調査データを用いれば可能である。磯と竹ノ下（2018）は、このようなデータである1995年SSM調査データと2015年SSM調査データを用い、多重対応分析を用いて文化資本を構成する変数が何であるかを考察している。読書に関し、1995年の質問紙には「小説や歴史」の本を読む頻度と子ども時代に読書をした頻度に関する質問

がある。2015年の質問紙には、前者の質問のみがある。両方の調査データから共通して言えることは、「小説や歴史」の本を読む頻度は文化資本の量と高い相関関係があるということである。

本稿のここまでの考察から、読書は文化の不平等や社会階層の形成に関わるということを指摘できる。しかしながら、どのようなものを読むことが、あるいはどのような読み物を好むことが、どのように不平等や社会分化に関わるのかということは、以上の考察からは述べることができない。このような考察を進めた代表的な研究としては、先述のベネットらの『文化・階級・卓越化』(Bennett et al. 2009)がある。彼らは、読むこと、音楽、視覚芸術などの領域ごとに文化活動を捉え、それぞれの領域をブルデューの界概念として概念化し、各々の界の特徴と分化原理を量的調査と計量分析とインタビューを組み合わせて分析している。

文化資本の定義には様々なものがあるが、その一例として『文化・階級・卓越化』によって再構成された文化資本概念がある。それとは、個別の界との関係で文化資本を捉え、各界における行為者同士の位置関係の分析を通じて浮かび上がってくる社会分化の構成要素の一つである(Bennett et al. 2009=2017: 68-75)。ベネットらは、分析上は文化資本を分解ないしは分節化し、多重対応分析の結果の理論的解釈で文化資本概念を再構成している。このような文化資本の捉え方はブルデューの方法と共通している。

資本の形態や構成物は「ケースバイケースである要因が前面に出てきてそれぞれの界ごとに変化するもの」(Bourdieu 1979a=1990-I:176-177)であり、「資本は界との関係なくしては存在することも機能することもできない」(Bourdieu & Wacquant 1992=2007:137)とされる。本稿ではこうして、文化資本を何らかの実体に直接対応するものとしてではなく、社会関係の機能として捉えることにする。文化資本については、拙著『認識と反省性—ピエール・ブルデューの社会学的思考』(磯2020)の第5章と拙稿「ブルデュー派階級分析の理論と方法」(磯2022)において、基本的な考え

方は示してある。本稿で概念化されている「文化資本」とは、文化の差異と不平等によって形成される社会的位置関係を規定する資源のことであり、特定の代理変数によって操作化できるものではなく、様々な社会関係が編みあわされている構造のことである⁽²⁾。

本稿は、『文化・階級・卓越化』で「読むことの界」とされているものを、現代日本の文脈で経験的に検討するための基礎作業である。『文化・階級・卓越化』(Bennett et al. 2009)と本稿の立場で異なることは、調査対象となる国以外には主として2点ある。一つは、「界」概念と「空間」概念の使い分けである。両者は明確には区別できず、ブルデューも両概念を互換的に用いることがある。本稿では、ブルデューの『ディスタンクション』(Bourdieu 1979)に倣い、「界」と言うほどには自律性がなく、「界」の記述を行うには情報やデータが不十分な場合、それを界ではなく「空間」と呼ぶことにする。『文化・階級・卓越化』で「界」とされているものはブルデューの用法では「空間」に意味が近い。同書と拙稿とでもう一点異なるのは、前者がイギリス社会として一般化できるように標本の大半を無作為抽出で選んでいるのに対し、拙稿では東京都民を対象にしたウェブ調査のみを用いていることである。したがって、本稿の議論は理論志向の基礎作業であって、何らかの母集団を明確に設定できる実証分析ではない。

以上の点を踏まえ、本稿では、文化活動による社会分化について、ウェブ調査データを用いた多重対応分析を通して考察する。本稿で具体的に扱う「文化活動」とは、読書とテレビ視聴である。これらの文化活動が、格差や不平等とどう関わることなのか。その関わり方は、社会経済的地位に還元できるだろうか。先行研究で示されてきたのは、読むことは何らかの文化の不平等と卓越化に関わるということである。テレビに関しては、日本には「テレビ的教養」としての文化資本のようなものがあつたことが示されているが、21世紀の社会階層や不平等と関連付けた計量分析はまだ行われていない。本稿ではしたがって、読書とテレビ視

聴がどのように社会分化に関わるかを分析することで、各々の文化活動に特有の分化の原理を解明することを目的とする。この作業は、ウェブ調査データの分析に依拠しつつも、理論的考察として行う。

2. 理論枠組み

ブルデューが『ディスタンクシオン』(Bourdieu 1979)などで用いた空間概念を界概念よりも経験的データに対応させやすい。ブルデューは、界概念と社会空間概念については理論的に展開させたが、空間概念は比較的曖昧なまま使われ続けた。ベネットらの『文化・階級・卓越化』(Bennett et al. 2009)で用いられている界概念は、ブルデューにおいては「空間」概念の方に意味が近い。知念渉のエスノグラフィでは、社会空間、界、空間が使い分けられているが、彼の用法はブルデューのそれに近い(知念 2018: 59-60)。

ブルデューは界概念を理論的に定式化した上で、具体的な記述とも両立させようとしたが、空間概念はこれらの両面で界概念ほど洗練されていない。本稿ではあえて「空間」概念の方に着目し、ブルデューの界概念を緩く広義に用いて「空間」とする。そこで人びとが読書とテレビ視聴とどう関わり、それらをどう捉えているかを考察の対象とする。本稿で用いる「空間」概念とは、国民国家のような単位の社会の階級構造を含蓄する「社会空間」ほど総合的ではなく、界概念ほど個別的かつ理論的でもないものである。社会空間よりは個別的であり、界概念よりは一般的な事象を捉えるための概念である。空間概念が便利なのは、量的調査で得られたデータを扱う場合である。個別の界における規則や行為者の動きを、量的調査だけで捉えることは不可能である。そうしたものを捉えるには、質的分析と歴史分析が必要だからである。逆にいえば、量的調査データを使う場合に空間概念を用い、空間概念と界概念の理論的関係を明確化することで、量的方法と質的方法を両立させることができる。本稿ではこのような立場に立ち、量的調査データを活用するために

空間概念を用いた上で、界概念と空間概念の理論的関係を考察する⁽³⁾。

3. 分析の方法

このような空間概念を経験的に捉える方法として確立されているのが、多重対応分析である。ブルデューは多重対応分析など、計量分析を用いた研究も行ったが、ブルデュー派計量分析と呼ぶことのできる方法は彼だけが練り上げたわけではなく、それは様々な社会学者と統計学者によって発展させられてきた。『文化・階級・卓越化』(Bennett et al. 2009)などは、そうした発展の過程で表れた研究成果の一つである⁽⁴⁾。ブルデュー派計量分析が比較的体系的に議論されているのは、フレデリック・ルバロンとブリジッド・ル・ルーが編纂した概説書である(Lebaron & Le Roux 2015)。ブルデュー派計量分析とは何かを単純化して述べるならば、多重対応分析を用いて(ブルデュー的な意味における)界ないしは社会空間を捉えるための方法といえよう。

多重対応分析において、アクティブ変数は次元削減によって軸を構成する要素となり、サプリメンタリ変数はアクティブ変数によって構成された幾何学的空間に事後的にプロットされる変数である。サプリメンタリ変数は、軸の構成には関わらない。多重対応分析はまた、アクティブ変数によって構築される幾何学的空間のなかに諸個人をプロットできる。本稿では行わないが、プロットされた個人に予めインタビュー等で質問紙よりも詳細なデータを提供してもらうことで、量的調査と質的調査を有機的に関連付けることも可能になる。

本稿で用いるデータは、私が設計し会社を通じて実施したウェブ調査によって得られたものである。この調査はモニターの3090名から回答を得ており、データクリーニングとコーディングは私が行った。無作為抽出ではなく有意抽出になるので、サンプルには何らかの偏りが想定される。また、本調査では社会階層に関わる質問項目として所得や職業に関するものが複数あるが、ウェブ調

査で尋ねるには限界があり、SSM 調査のような質の高いデータとしては扱うことができない。このような限界があることを踏まえ、本稿ではデータとしての質の低そうな変数はアクティブ変数としては用いないことにする。このような方針を採った場合でも、本稿の目的には影響しない。

本稿では、2種類の空間を構築した上で、理論的考察を行う2種類とは、読書空間と社会意識空間である。調査データの中から、各々の空間の構築に役立つと思われる変数を選び、それらをアクティブ変数に指定して分析を行う。加えて、そうした変数と相関関係のありそうな他の変数についてはサプリメンタリ変数に指定する。このことにより、個別の空間としての特徴を多重対応分析により描くことが可能になる。

本稿の分析で用いる変数については、各回答項目の度数を確認し、度数が100未満の項目は原則として他の項目（選択肢）と結合させた。個人年収と世帯収入についても複数の項目を結合している。年収の区分として生活水準の違いが見えやすいと思われ、さらに度数がなるべく100を超えるようにリコードを行った。ところで、対応分析では変数に用いる回答項目のことをモダリティと呼ぶことが多い (Bennet et al. 2009; Le Roux 2014)。本稿でも、以下ではこの用語法に従うことにする。

4. 分析結果と主要な軸の解釈

本節では、分析結果を読書空間とテレビ視聴空間の2種類に分けて論じる。本節ではそれぞれについて、多重対応分析を行った上で導出される主要な3軸の慣性 (inertia) の表、モダリティの座標値を用いた散布図、この散布図に個人のクラウドをプロットした図を示す。この場合の「慣性」とは、分散とほぼ同義である。本稿では慣性について、通常の分散に加え、ベンゼクリ補正比率 (Benzecri's modified rates) の値を用いる。これは、慣性の二次元や三次元での視覚化を正当化するために、各軸の分散の集約度を強調する数理的補正を施すものである。

(1) 読書空間

読書空間の慣性は表1の通りである。補正なしの慣性では第3軸と第4軸の説明率があまり変わらないように見えるが、ベンゼクリ補正比率では第1軸に説明率が集中しており、第3軸と第4軸の重要性は低く見える。ここで第1軸と第2軸を中心に考えるのが妥当だろう。問題は第3軸と第4軸の扱いであるが、ここでは、第3軸のみを検討対象にする。

読書空間の構築に用いた変数は、以下の質問項目によって構成される。ここでは、読書のジャンルを14種類に分け、自由回答として「その他」

表1 読書空間の主要な軸と慣性

Axis	%of explained variance	Benzecri's modified rates(%)
1	18.0	87.9
2	10.3	7.5
3	9.3	3.5
4	8.3	1.0

表2 読書空間の構築に用いた項目

Q4	趣味で読む本の種類と回答数 (複数回答可)	
1	ビジネス書	774
2	学術的な啓蒙書	210
3	学術的な研究書	254
4	古典文学作品	283
5	現代文学作品	982
6	ラノベ	218
7	マンガ	1041
8	美術関係	269
9	音楽関係	454
10	映画関係	365
11	自己啓発書	535
12	スポーツ関係	439
13	医療・健康	498
14	実用書	877
15	その他	325
	全体	3090

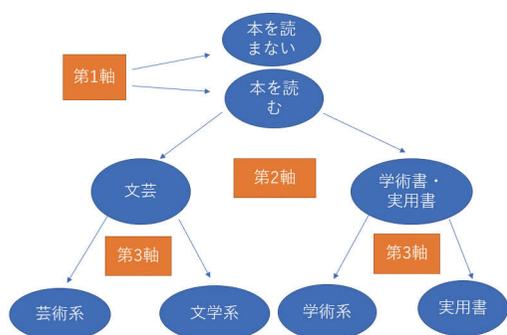


図3 読書空間の分化の構図

デューが『ディスタンクション』で論じた文化と階級の関係と似たような構図を、本稿の読書空間に見ることができるのである。

上記の図では「芸術系」と「実用書」が最も遠い関係にあり、両者が相容れないかのように見えかねない。ここでクロス表を確認する必要がある。趣味で読む本として、「美術関係」と「音楽関係」をともに挙げた回答者数は121であり、両方とも読まない回答者数は2,488であった。「美術関係」と「実用書」の場合、両方を読む回答者数が131、前者を読むが後者は読まないという回答者数は323であった。「音楽関係」と「実用書」の場合、両方を読む回答者数が112、前者を読むが後者は読まないという回答者数は157であった。このように、そもそも本を読むか読まないかという差異の方が分化の仕方としては重要であり、芸術系の本を趣味で読む人の多くは実用書も読んでいることがわかる。この結果を「文化的オムニボア」と解釈することも可能であるが、どのジャンルの嗜好がどこまで交われば「オムニボア」と言えるのかという別の論点が出てきてしまうため、本稿ではこの問題には立ち入らない。本節で確認したいことは、読書空間の分化の構造である。

(2) テレビ視聴空間

テレビ視聴空間の慣性は以下の通りである。補正なしの慣性では第3軸と第4軸の説明率があま

り変わらないように見えるが、ベンゼクリ補正比率では第1軸に説明率が集中しており、第3軸と第4軸の重要性は低く見える。ここで第1軸と第2軸を中心に考えるのが妥当だろう。問題は第3軸と第4軸の扱いであるが、ここではさしあたり、第3軸のみを検討対象にする。

テレビ視聴空間の構築に用いた変数は、「どのようなテレビ番組が好きですか」という質問により回答者が（複数）選択した項目によって構成される。この番組分類に関しては、テレビ番組の案内をするウェブサイトを参考にした。人びとがテレビ番組を分類する方法として、人口に膾炙した知識と思われるからである。本ウェブ調査では、地上波のテレビ番組の視聴頻度も訪ねている。表4は、番組の種類に加えてこの視聴頻度も合わせたクロス表である。

以上の項目から成るモダリティ（変数）が、下の図である。「放送大学」と「双方向番組」は選択した回答者の割合が際立って少なかったため、アクティブ変数ではなくサブリメンタリ変数に指定した。これらが外れ値としてデータの構造に大きな影響を与えてしまうからである。

第1軸が示しているのは、娯楽ないしは教養のためにテレビ番組を視聴するか否かの傾向であると考えられる。モダリティの名称に「1」が付いているのは当該テレビ番組が「好き」という回答であり、「0」はその選択肢を選ばなかったことを意味する。図の左方には、テレビ番組に関して「好き」という回答ではないモダリティが並んでいるが、これらはアクティブ変数である。図の右方と左方のアクティブ変数を見ると、第1軸の原理を捉えることができる。左方にはエンターテインメントや教養番組を「好き」ではないというモダ

表3 テレビ視聴空間の主要な軸と慣性

Axis	%of explained variance	Benzécri's modified rates(%)
1	21.2	96.4
2	7.6	2.1
3	7.2	1.3
4	6.0	0.2

表4 テレビ視聴に関する質問項目

番組の種類	地上波のテレビを視聴する頻度				
	毎日	週に複数回	月に1回以上	視聴しない	合計
報道番組	1,556	205	72	53	1,886
情報番組	1,478	192	62	46	1,778
教養番組	726	126	46	33	931
趣味番組	892	128	50	30	1,100
教育番組	323	51	14	12	400
料理番組	739	95	35	26	895
音楽番組	890	105	34	41	1,070
スポーツ中継	847	132	42	41	1,062
オペラ・室内楽	169	25	7	9	210
美術番組	306	47	19	20	392
映画	1,251	182	57	64	1,554
旅行・観光番組	1,040	133	45	42	1,260
ヒューマンバラエティ	670	95	26	21	812
ドキュメントバラエティ	865	105	35	25	1,030
生活情報番組	665	53	13	17	748
動物番組	574	64	14	22	674
ゲーム番組	271	42	17	17	347
恋愛バラエティ	287	33	10	10	340
双方向番組	37	2	1	4	44
お笑い番組	997	139	55	40	1,231
子供番組	122	17	7	12	158
放送大学	31	11	5	6	53

リティが並び、右方には逆にそうした番組を「好き」というモダリティが並んでいる。こうした第1軸による分化原理が、テレビ視聴空間においてはもっとも重要である。

テレビ視聴空間を3次元で捉えるならば、第1軸の構造を前提に第2軸と第3軸の分化を見る必要がある。以下が第2軸と第3軸の散布図である。第2軸は上下の分布を表すが、第4象限に並ぶモダリティを見ると、文化活動の参加頻度が最も高いことを示すモダリティと教育への関心の高さを示すモダリティが並んでいる。例えばアクティブ変数として、「美術番組」、「教養番組」「教

育番組」、「オペラ・室内楽」などを「好き」とする変数、サプリメント変数として、美術館に毎月行く (museum 1)、クラシック音楽のコンサートに毎月行く (concert 1)、趣味で美術書を読む (美術書 1)、趣味で学術書や研究書を読む (研究書 1)、単館系アート映画が「好き」(単館系アート映画) とする変数などが見られる。

第3軸が示しているものは曖昧であるが、下の図の第3象限においては、支持政党が立憲民主党であること (支持政党 2)、個人所得が年収800万円以上 (REC_PINCOME 5, REC_PINCOME 6)、情報番組が「好き」、報道番組が「好き」、な

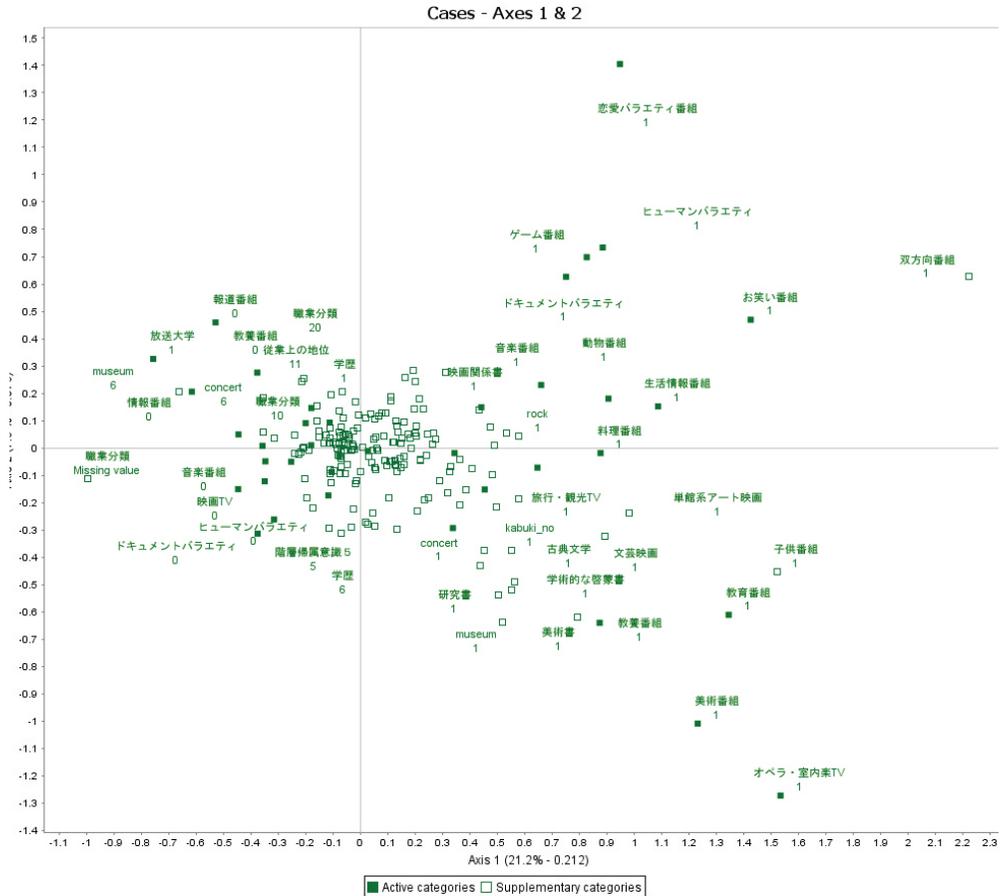


図4 テレビ視聴空間（第1軸と第2軸）

どのモダリティが並んでいる。この第3象限に関しては、実利志向の人びとが多いと考えられるかもしれない。第3軸の示す分化の原理は、所得と経済合理性という意味での経済的なものであると解することができなくはない。

ところで、地上波のテレビを毎日視聴するという回答者千人以上が選んだ番組の種類は、「報道番組」, 「情報番組」, 「映画」, 「旅行・観光番組」の4点である。これらのモダリティは、図5では左側に位置している。このことから示唆されるのは、「(地上波) テレビをあまり視聴しない」こと自体に卓越化の作用があるのではないかということである⁽⁵⁾。

5. 結論

本稿では、2018年に実施したウェブ調査データを用いた多重対応分析により、「読書空間」と「テレビ視聴空間」という2つの幾何学的空間の構築を行った。その上で、各々の空間にはどのような分化原理が見られるかを分析してきた。繰り返すように、本稿で用いた調査データは東京都在住のモニターを対象とした有意抽出によって回答者が選ばれており、何らかの母集団を想定して議論を一般化することはできない。したがって、本稿の議論から展開できることは、相応の偏りもあると考えられるウェブ調査データの分析から着想

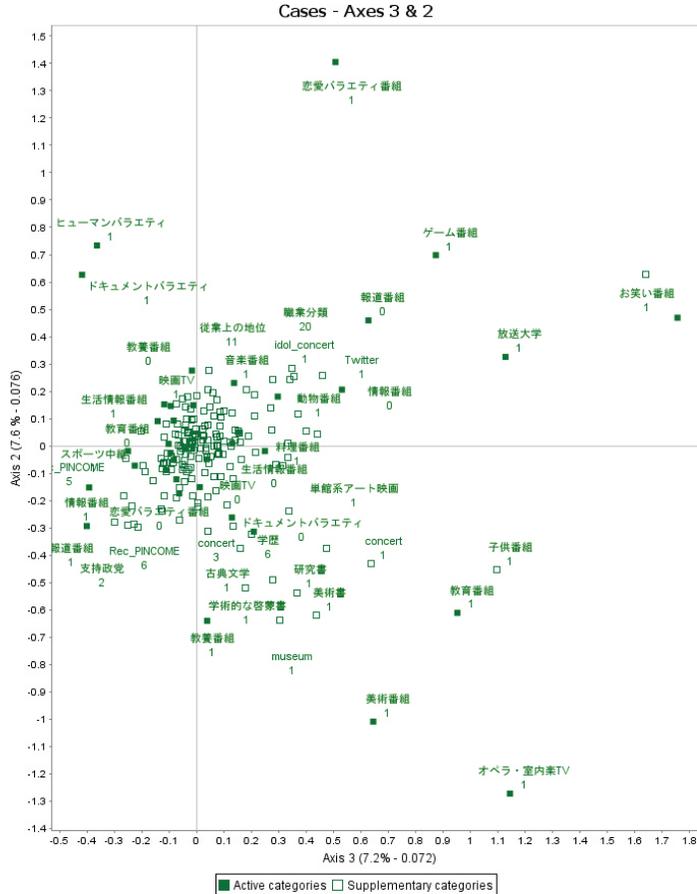


図5 テレビ視聴空間（第2軸と第3軸）

を得た、理論的考察である。

このような考察として第一に、ブルデューにおいては曖昧なままにされていた（社会空間概念以外の）空間概念の定式化である。ブルデューの界概念は、各々の界に特有の規則と境界の記述に加え、行為者間の微妙な差異化の論理を捉えるために用いられる。したがって、量的調査で界を捉えるのは難しく、質的分析を中心に行う必要がある。他方で、社会空間概念は階級構造に意味が近く、「日本社会」や「フランス社会」といった大きなまとまりの社会単位における分化と不平等の一般的傾向を描くために用いられる。社会空間と区別される空間概念は、界ほどミクロではなく、社会空間ほどマクロではない。空間概念は、量的

調査によって特定の領域の一般的傾向を捉えるのに有用な概念である。本稿では、読書空間とテレビ視聴空間という2種類の空間を構築したが、これらは例えば、「メディア界」や「テレビ界」、あるいは「読むことの界」といった対象と接続することが可能である。加えて、社会空間のサブ領域として個別の空間を位置付けることができ、理論的かつ経験的に界と社会空間を取り結ぶことが可能である。ただし、本稿における「界」と「空間」の関係の理論的考察は、不十分である。この問題については、計量分析とは別に理論研究が必要であり、今後の課題の一つである。

本稿の結論として展開できる理論的考察は、文化資本と社会分化の関係である。読書空間とテレ

び視聴空間は、それぞれ異なる原理によって分化している。他方で、両方の空間において、文化資本の量が相対的に多いと思われる行為者の集まる領域を確認することができた。ここで「文化資本」とは、何らかの実体ではなく社会関係の機能のことである。また、これは社会分化を構成する要素の一つであって、調査データの分析の結果に浮かび上がってくる特徴である。本稿で示したのは、機能としての文化資本は個別の「空間」ごとに異なった顕れ方をするが、それによって構成される分化には「文化」と呼びうる共通性があるということである。このことが示唆するのは、様々な文化的な空間において、文化資本による分化は基本的な構成要素となるということである。文化資本というのは予め明確な定義を与えられるものではなく、経験的研究に基づく理論的考察を経て発見されるものである。すなわち、個別の界において、「空間」においても、「社会空間」においても、具体的にどのような文化的資源が文化資本と呼べるようなものになるかどうかは、経験的にしかわからない。文化資本をブラックボックスとして用いるのではなく、具体的な経験的研究において実のある分析概念とするには、以上のことに自覚的である必要がある。

本稿で用いたデータには偏りがあるものの、母集団を設定した上で無作為に標本抽出したデータを用いても、理論的には似たような推論が可能であるように思われる。これはまだ、仮説に過ぎない。本稿で行った理論的考察は、無作為抽出によって得られた調査データに加え、インタビュー調査を組み合わせることによって十全な経験的研究となることができる。そのような経験的研究に向かうための予備的考察が本稿の議論である。

《注》

- (1) 具体的に何%が「高い」のかという問題は、調査の質と研究目的によって異なる。本稿で前提にすべきことは、有意抽出のウェブ調査では「高い」かどうかさえ判断できないということである。
- (2) 文化資本の捉え方については、『認識と反省性』(磯 2020) の第4章と5章、および「ブルデュー派階級分析の理論と方法」(磯 2022) を参照。
- (3) 平石は日本のポピュラー音楽を界として捉え、独

自の法でデータベースを作って多重対応分析を行っている(平石 2016)。これは本稿に先行する重要な研究である。平石が「界」としている概念を、私は「空間」としている。本稿全体で想定されている「ブルデュー社会学」に関する私の見解は、拙著で示した(磯 2020)。

- (4) 『文化・階級・卓越化』で依拠した理論と方法をオーストリア社会に適用した共同研究の成果として、*Fields, Capitals, Habitus: Australian Culture, Inequalities and Social Divisions* (Bennett et al. 2021) がある。後者については、*Journal of Sociology* で誌上シンポジウムが特集として組まれており、拙稿 (Iso 2023) もその一部を成している。
- (5) 本稿では紙幅の都合行わないが、テレビの視聴に関する文化的オムニボアの検討をするならば、この点も考慮する必要があるだろう。

文献

- Bennett, Tony et al., 2009, *Culture, Class Distinction*, London: Routledge. [=2017, 磯・香川・森田・知念・相澤訳『文化・階級・卓越化』青弓社]
- Bennett T., Carter D., Gayo M., Kelly M., Noble G., eds., 2021, *Fields, Capitals, Habitus: Australian Culture, Inequalities and Social Divisions*, London: Routledge.
- Bourdieu, Pierre, 1979, *La Distinction. Critique sociale du jugement*, Paris, Éd. de Minuit. [=1990, 知念渉, 2018, 『〈ヤンチャな子ら〉のエスノグラフィー：ヤンキーの生活世界を描き出す』青弓社。石井洋二郎訳『ディスタクシオン：社会的判断力批判 (I-II) 藤原書店]
- 磯直樹・竹ノ下弘久, 2018, 「現代日本の文化資本と階級分化——1995年SSMデータと2015年SSMデータの多重対応分析」『2015年社会階層と社会移動調査研究会 (SSM2015) 報告書：意識 I』17-37。
- 磯直樹, 2020, 『認識と反省性—ピエール・ブルデューの社会学的思考』, 法政大学出版局。
- 磯直樹, 2022, 「ブルデュー派階級分析の理論と方法」『教育社会学研究』第110集, 91-113。
- 福岡良明, 2017 『「働く青年」と教養の戦後史：「人生雑誌」と読者のゆくえ』筑摩書房。
- 平石貴士, 2016, 「日本のポピュラー音楽の界の構造分析：多重対応分析を用いた構造の客観化」『立命館産業社会論集』52 (2), 67-86。
- Hoggart, Richard, 1957, *The Uses of Literacy: Aspects of Working-Class Life*, London: Chatto and Windus. [=1986, 香内三郎訳『読み書き能力の効用』晶文社。]
- Iso, N., 2022, "Legitimate culture, field of power, and domination", *Journal of Sociology*, 59 (1), in print.
- Lebaron, Frédéric & Brigitte Le Roux, 2015, *La méthodologie de Pierre Bourdieu en action* :

- espace culturel, espace social et analyse des données, Paris : Dunod.
- 佐藤卓己, 2019, 『テレビ的教養：一億総博知化への系譜』岩波書店。
- 竹内洋, 2003, 『教養主義の没落』中央公論新社。
- 筒井清忠, 2009, 『日本型「教養」の運命：歴史社会学的考察』岩波書店。
- Vincent, David, 2000, *The Rise of Mass Literacy: Reading and Writing in Modern Europe*, Cambridge: Polity Press. [=2011, 岩下誠他訳
- 『マス・リテラシーの時代：近代ヨーロッパにおける読み書きの普及と教育』新曜社。]
- Williams, Raymond, 2003, *Television: Technology and Cultural Form*; edited by Ederyn Williams, London: Routledge. [=2020, 木村茂雄・山田雄三訳『テレビジョン：テクノロジーと文化の形成』ミネルヴァ書房。]